# Makiba

## 15th Graphic

フリースクール
ワークス
ディサービス

ファミリーホーム
自立援助ホーム
アフターケア
and more….

# まきばフリースクール いままでの15年と これからの10年

誰かに助けてほしい私たちは

誰かに助けてほしいそのままで

誰かの助けになれるだろうか

# Makiba
## 15th Graphic


○巻頭言
「必要があれば先に手をのばす」 1

## いままでの15年 2

○まきばの年表 3
○各事業の活動内容について 5
○第1期　まきばフリースクール誕生まで 7
武田理事長インタビュー
○第2期　武田理事長＆武田惠実理事対談 8
○第3期　OBインタビュー 9
○第4期　グループトーク 11

## これからの10年 13

○多様性とつながりによる活動の成長 14
○組織イメージ図 15
○職員ボランティア行動規範 16
○各事業の未来予想図 18
○未来カレンダー 21

寄稿　まきばに関わって 22
心理カウンセラー　早坂　文彦

寄稿
日本ファミリーホーム協議会会長
宮城県里親会なごみの会会長
卜蔵康行 23

これまで活動を支援してくださった方々へ 24

# 巻頭言
# 「必要があれば先に手を伸ばす」

## 武田　和浩

不登校新聞2000年5月1日付けに「まきばフリースクール」が掲載され、その記事の最後に私はこう書いた。
「すべての運営は、賛同してくださる方の自発的な支援で支えられてきている。先立つお金がなくても、そこに見過ごすことのできない必要があるならば、手は先に伸ばされる。そして必要は満たされる。」
このまきばの理念、方針はずうっと変っていない。今も、これからも続いていく。
私が人生に行き詰ったどん底の時に、関わり寄り添ってくれた牧師さんがこう言った。
「武田さん、何が問題ですか？…人が人として生きていくために、どうしても必要なことのためには、誰が助けなくても、その時は天が助ける。…だから、あきらめないでお祈りしましょう。」

まきばフリースクール開設以来、何度も何度も自分の努力では越えられない壁・（限界）にぶちあたった。今度こそ、もうダメかとあきらめそうになった。不安で眠れない夜を過ごした。
それでも目を閉じてお祈りすると、私のために喜んで犠牲を払い、いのち懸けで関わってくれた恩師の姿が目に浮かび、心があつくなる。こんなに大変な思いをして、それでも諦めないで、彼は私を助けてくれたのか！
俺にそこまでの価値があると信じてくれた。有り難い。
その気持ちを無駄にしたくない。報いたい。

「いまあるのはそのおかげ。
だから、自分がしてもらったことをさせてもらおう。」

それで腹が決まり、不安は薄れ、希望を持ちつつ震えながら一歩を踏み出す。
目の前にいるひとりの必要のために、あと先考えずに出来る限りのことをやる。その人が元気になれば、お金もついてくる。そう信じてやってきた。
いつ潰れてもおかしくなかったが、15年続いて、もうすぐ16年。
奇跡の連続だった。ほんとうに必要なことのためには、天が助けてくれた。
私は信じて諦めなかっただけ。
フリースクール、デイサービス、ファミリーホーム、自立援助ホーム、自立準備ホーム、障がい福祉サービス、…全部つながっている。互いの不足を補い、満たし合う関係で成り立っている。
私は、笑顔を見たいだけ。かつての自分がそうだったように。
そして、たくさんの笑顔と出会った。
それが私の宝物。
傷ついた人には不思議な力がある。
苦しみを分ければ半分になり、喜びを分ければ倍増する。
「まきば」は、これからがおもしろい。

まきばフリースクール誕生からの１５年間、さらには誕生までの日々は、大きく４期に分けられます。

〇第１期：まきばフリースクール誕生まで（～１９９９年）

〇第２期：フリースクール開設から高齢者介護ディサービス開所頃（１９９９年～２００４年）

〇第３期：フリースクール再スタートから震災まで（２００５年～２０１１年）

〇第４期：震災後の事業拡大期（２０１１年～２０１４年）

それぞれに時期を、理事やスタッフ、OBメンバーが共に振り返りました。

# まきばの年表

| | |
|---|---|
| 1981年2月 | 人生の目的としていた夢が破れ、目標を失い（高校2年）退学届けを提出する。自分のような孤独に苦しみ生きることに悩む若者の良き相談相手になれる大人になる事を決意する。 |
| 1981年12月 | イエスをキリスト（救い主）と信じる。 |
| 1982年1月 | 牧場を運営しながら、生き辛さを抱えた子ども達の共同生活を通して神の愛（アガペー）を証しする志（福音牧場）を抱く。 |
| 1984年4月 | 福音牧場実現のために、宮城県農業実践大学校（畜産学部）に入学。 |
| 1987年～1991年 | 畜産関係の仕事に携わり、牧場（1年間）で働く。 |
| 1991年7月 | ケアリング（必要に応える）ミニストリー・＜アメリカ研修（2週間）＞に参加して、フリースクール開設を決意する。 |
| 1991年9月 | 福音牧場・フリースクール開設のために、拡大宣教院で（3年間）訓練を受ける。 |
| 1994年～1998年 | 大崎市古川で子どもの遊び場（ミニ四駆ランドを開設し、寄宿型のフリースクールの必要性を痛感する。 |
| 1998年 | 栗原市高清水に引っ越し530坪の畑に、ポニー、羊、うさぎ、犬、ネコを飼いながら、自宅兼フリースクール建設がスタートする。 |
| 1999年9月14日 | 「まきばフリースクール」開所式 |
| 2000年1月 | 宮城県に養育里親登録をする。 |
| 2000年～2004年 | 全国から口コミで、「不登校、ひきこもり、統合失調症、うつ病、非行、アルコール・薬物依存症、…さまざまな生き辛さを抱えた方々が集い、私たち家族（実子4人と里子3人）と共同生活をする。 |
| 2004年3月 | ひきこもりの青年たちの回復・就労の場、高齢者の安心できる居場所として、「デイサービスまきば」（介護保険事業所）と宅老所を開設する。 |
| 2006年4月 | フリースクール事業再開 |
| 2006年5月 | 大崎市古川に女子寮開所（女子寮→2011～男子寮→2013～自立準備ホーム）<br>会報誌「まきばの四季」発行開始 |
| 2006年6月 | 大崎市古川に男子寮開所（2014～まきばの実り） |
| 2006年9月 | 大崎市古川に家族寮開所（2009～愛子園） |

| | |
|---|---|
| 2007年5月 | 第1回田植え |
| 2007年8月 | サマーキャンプ(加美町宮崎)　網地島サマーキャンプの前身 |
| 2007年11月 | 第1回稲刈り |
| 2008年3月 | 第1回全員まとめて誕生日おめでとう祭 |
| 2008年8月 | 第1回網地島サマーキャンプ |
| 2008年10月 | まきば親の勉強会開始 |
| 2008年12月 | 第1回クリスマスパーティー |
| 2009年3月 | ファミリーホーム愛子園開所 |
| 2009年6月 | 就労支援事業まきばワークス開始 |
| 2010年1月 | 特定非営利活動法人(NPO法人)の認証を得る |
| 2010年4月 | 文部科学省生徒指導・進路指導総合推進事業委託(～3月)<br>「人間関係に困難を抱え、不登校状態・又はその回復途上にある中学・高校年代の生徒に対する自己肯定心・意欲の回復支援プログラムの開発」 |
| 2010年10月 | 第1回文化祭 |
| 2011年3月 | 東日本大震災　復興支援開始 |
| 2011年4月 | 文部科学省生徒指導・進路指導総合推進事業委託(～3月)<br>「高等学校不登校生徒や高等学校中途退学者、中卒後に進路が定まっていない者等義務教育修了後の段階で問題を抱える子どもに対する教育支援センターやNPO等民間団体を活用した社会的自立支援」 |
| 2012年4月 | 子ども・若者の貧困対策研究会開催(～3月　計12回) |
| 2012年7月 | 男子の自立援助ホーム峠のまきば開所<br>東北フリースクールスポーツ大会2012開催 |
| 2013年7月 | 東北フリースクールスポーツ大会2013開催 |
| 2013年9月 | 自立準備ホーム事業開始 |
| 2014年4月 | 自立支援事業あじさいホーム開所 |
| 2014年5月 | 女子の自立援助ホーム愛子2開所 |
| 2014年6月 | アフターケアかなりや開所 |

# 各事業の活動内容について

## 教育支援・居場所提供事業
## まきばフリースクール(1999年～)

不登校や引きこもり・発達障害など、生きづらさを抱えた本人と家族に対し、心の居場所づくり、自立・教育支援に関する事業を行っています。年齢の制限もなく、ひとりひとりの個性と必要にあわせ、体験から学ぶことを重視しながら、オーダーメイドで回復と成長を支援しています。

## 障害福祉サービス事業
## まきばの実り(2014年～)

宮城県に認可された指定障害福祉サービス事業所で、就労継続支援B型事業・就労移行支援事業の2つの事業を行う多機能型事業所です。障害という生き辛さを抱える青年たちの居場所・就労訓練の場として開かれています。

「誰もがありのままを尊重され、周囲と調和し安心して働き続けながら地域社会に貢献できる場の実現」を目指しています。

主な作業は、まき畑での野菜の栽培・販売です。就労継続支援B型は、障害を抱える青年たちへ生産活動を通じて就労の機会を提供しています。

就労移行支援事業は、一般の就労を希望される方へ事業所内外で訓練を行うと同時に、知識・技術を習得し、一般就労を目指します。それぞれ様々なものを抱えながらも、社会参加しています。

## ファミリーホーム事業
## 愛子園(2009年～)

ファミリーホームとは、児童福祉法に基づく小規模住居型児童養育事業のことです。

様々な事情で家族とともに暮らすことのできない子どもたち5～6人を家庭的な暮らしのなかで養育しています。

## 自立援助ホーム事業
## **峠のまきば**(2012年～)
## **愛子2**(2014年～)

義務教育終了後の、15才からおおむね20才までの家庭で生活することのできない子どもに生活の場を提供し、自立を支援するものです。児童福祉法に基づく児童自立生活援助事業で、児童相談所等の関係機関と連携して子どもたちの生活と自立を支援しています。

対象となる子どもたちは、被虐待・発達障害・高校中退・少年院からの身元引受など多様な困難を抱えていることも多く、高年齢児童であるため経済的・社会的自立は差し迫った課題となってのしかかっている状況です。

当団体では峠のまきば(男子)・愛子2(女子)を運営しています。社会に早く「出す」のではなく自分の考えと意志と力をもって「出る」、退所後の数十年を安心して働き生活していくために今必要なことを身につける、を頭に置きながらの生活・自立支援と、あたたかで穏やかな「帰ってこられる居場所」づくりに取り組んでいます。

## 自立支援事業
## **あじさいホーム**(2014年～)

就労自立を目指し、生活支援を必要とする10代後半から20代の青年等に対し、生活空間・食事の提供や就労支援、人のつながりを広げるサポート等を行っています。

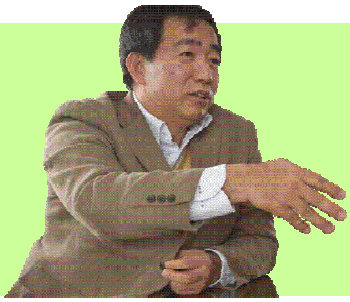
「自立準備ホーム事業も含め、それぞれの理由で行き場のない青年等の居場所となり、生涯続くような繋がりを作る事を助け自立を支援する」ことを可能にする活動内容の充実を目指しています。活動の一層の充実のために、仙台市内においてカフェを開設・運営しています。

## アフターケア事業
## **かなりや**(2014年～)

アフターケアを必要とする方に、住居の提供、ショートステイの部屋の貸し出しなどの生活支援を行います。

利用者の社会性を育む場として、フリーマーケットや茶話会の定期開催をしています。

不登校、引きこもり、DV.シングルマザー等の相談対応も行っています。



第１期　まきばフリースクール誕生まで

# 武田理事長インタビュー

（インタビュアー：櫻井由紀）

## 価値観の転換

櫻井（以下、さ）：まきばフリースクールをはじめたようと思ったきっかけは？
武田（以下、た）：私は、自分の好きなこと、やりがいのあることで、１番になることが生きがいでした。高校生の時に挫折を味わい、生きる意味さえ見失っていた時に違う価値観と出会った。それが転機です。
さ：その転機はどのように訪れたのですか？
た：授業の一環で、クラスのみんなと先生と牧師さんの話を聞きに教会へ行きました。それから教会へ通うようになり、洗礼を受けるに至りました。人と比べて評価しなくなり、楽になった。希望ができた。そして、自分のように悩む人に、親身になれる大人になろうと思ったんです。

## 恩師との出会い

た：二十七歳の時、ある牧師さんから手を差し伸べられて、アメリカへ研修に行きました。そこでまた、いろんな必要を抱えた人をサポートしていきたい！と思ったんです。そしてケアリングミニストリー（必要に応える伝道）をするために神学校へ行きました。卒業後、大崎市で古川チャペルをはじめました。
さ：そこではどのようなことをしていたのでしょうか？
た：子どもたちが集まれる時間を作りました。一緒に遊ぶうち、みんながミニ四駆を持ち寄って自由に遊べる、ミニ四駆ランドを開設しました。新聞配達２区域して、ハム屋で働きながら、午後から子どもたちと遊ぶ生活をしていました。毎日いろんなことがありながら、みんなが抱えている家庭の問題がわかってきた。この子たちは家に帰れば、厳しい家庭事情があって、、、、。寝食を共にして関わらないと、人生にアプローチできない。という必要に気づいたんです。
さ：財政的には、どうですか？
た：家賃を払うのも厳しかったです。もうだめだと思った時、、、ミニ四駆ランドの取組みを、クリスチャン関係の番組で見た方から、献金が寄せられました。ちょうど期限が迫っていた支払いができる金額が集まったんです。また同時期に、アメリカ研修に連れて行ってくれた牧師さんから、「お金がないくらいであきらめてはならない。人が生きていく上でどうしても必要なときには、誰が助けなくても、天が助ける」という言葉をいただきました。一緒にこころをこめて祈ってくれて、、、。次の日、いつものように、朝のお祈りをしていた時、天の声が聞こえた気がしました。「子どもちのために、命を捨てなさい」とも聞こえました。その時にフリースクールやろう、と思ったんです。

## 最後は、天がたすける

さ：ご両親の反応はどうだったのでしょう？
た：実家の両親は、物心両面で助けてくれました。しかし家内や孫の生活のことを心配し、最後は「誓約書」を交わして約束しました。これでだめなら、普通のサラリーマンになると。
その時、心の中で、「これで天が助けてくれる」と確信しました。こんなにぎりぎりの状態で、それでも天が助けてくれなかったら、信仰を捨てようとまで思ったんです。そうしたら全国、海外から、献金があつまってきた。それをみて、両親が土地とお金を、義兄と祖父がお金を援助してくれた。それを頭金にローンをくんだが、到底足りず、、、。大工さんの厚意で、倉庫に眠っている材料を提供してくれて、基礎づくりなどは自分でして、、、途中過労で倒れながらも、たくさんの方々に助けてもらいながら、やっと拠点となる家を建てました。

## 今後は家族時間を大切に

た：まきばが続いているのは家内のおかげ。彼女のおかげで、いつも原点に帰ることができます。また、今までは家族との時間はすべて後回しでした。現場のスタッフに任せるところは任せて、一緒に食事をしたり、でかけたり、、、家族との時間を大切にしていきたいと思います。

開設した頃の写真

第２期（１９９９～２００４年：フリースクール開設から高齢者介護ディサービス開所まで）

# 武田理事長＆武田惠美理事対談

武田理事長と、よく家族と間違われる武田惠美理事。ディサービス立ち上げにあたって、職員としてまきばの加わりました。そのお二人が、初期のまきばを振り返ります。

## ありのままで誰かの役に立つ

**武田理事長（以下、た）**：フリースクールを１９９９年に開設。ディサービスは２００４年に開設した。それまでは雑居生活。フリースクールに関わる人たちはいろんな長所があるけど、一歩踏み出せず、自立できなかった。その青年の自立のために、たくさんの方に応援していただきながら、通所介護施設「ディサービスまきば」を立ち上げた。だけど全然お客さんが来ない。そんな頃、口ばかり達者で、体は動かないS君が手伝っていたんだよね。そのS君に、ディサービスに通っていたMさんが怒った。「若いんだから、しっかりしろ！」って。Sくんの手をとって散歩に行くようになった。そうしたらMさんはみるみる元気になっていった。

**武田惠美理事（以下、え）**：化粧して香水つけるようになって。どんどん若返って・・。

**た**：最初は、S君にやる気を起こさせて自立させようと思っていたけど、そのままありのままで良かった。もともと親分肌のMさんは、役割ができて元気になった。青年をなんとか変えようと思ったけど、青年はありのままでいいんだと。ありのままだったからこそ、Mさんは元気になった。自分よりもっと大変な人の役に立って、そこから元気をもらっていく。

## 青年たちに信頼される関わり

**え**：介護度が高い方が多くて、、、。入浴介助を青年たちに手伝ってもらいました。利用者さんと私が会話している様子を、そばで聞いているだけなんだけど、役に立っているという実感が生まれていったようです。そうして自信をつけ、だんだん一人で入浴介助を覚えていきました。

**た**：今まで何人かの青年たちがディサービスで職業体験から、職業訓練、そして職業として携わってきた。どの青年にも共通するのが、まきばで信頼し安心できる人と出会って、誰にも言えない過去のことを話して、気持ちに共感してもらっていた。ただ、昼はそうやって良くても、夜なってまた不安になって、恵美さんに電話かけて。

**え**：夜中まで話してました。

**た**：みんな精一杯なんだね。

## 話して手放す

**た**：この前、今は卒業して働いている青年から「まきばは良かった」って言われたんでしょ？

**え**：そうそう。外に出て、いろんな面接を受けたり、働き始めたりして、ギャップに驚くことが多いみたい。社会に出て、簡単に考えていたことができなくて、、、。お金出してフリースクールにきながら、職業体験でディに入る。次に仕事を覚えていって、仕事として、お金をもらいながら、責任をともなって関わる、という風にステップアップしていくことが、社会に出たあとのステップアップにもいいと思います。あとは素直さが、社会に出た後の成長の度合いに関わってくるように思う。

**た**：ディに入っている時も、恵美さんが、その青年たちの気持ちを代弁するんだよね。「本人は一生懸命やっている」と、１００％青年の立場に立てるのがいいと思う。私もうらやましい（笑）

**え**：（笑）

**た**：介護に抵抗あって、暴言はいたり、攻撃的な利用者さんもいたけど、ある青年は「この人さみしいだけだ。俺と一緒だ」と言った。そういう意味では、気持ちがわかりあえる存在なのかもしれない。髪をひっぱられても逃げないで関わり続ける姿を見て、「マザーテレサはインドにいると思ったけど、まきばにいる」と、恵美さんのことを言った青年もいた。恵美さんは、やっていることは否定しても、その人自身は否定しない。

**え**：みんな同じ道筋を通る。１対１の時は顔が違う。それを通らないと、国道にでない、、、山道歩かないと、出ないみたいな感じ

**た**：自分のことを否定しないで、丸ごと共感して泣いてくれる存在が大きい。話せば話すほど本人にとってはいい。

**え**：話すって大切ですね。

第３期（２００５～２０１０年：震災の前の年まで）

# OBインタビュー

フリースクールを巣立っていったOBたちに、懐かしいエピソードや思い出に残るプログラムを突撃インタビュー！！

２００５年は私がフリースクールの職員になった年です。その頃フリースクールは過渡期を迎えており、武田家に宿泊して生活を共にするスタイルから、自宅や寮から通ってくるスタイルへ変わるタイミングでした。

私が来たときは利用者が一度０人に戻った時で、まさに新しい再スタート。そこから徐々に利用する子ども・青年たちは増え、「必要に手を伸ばす」という方針から年齢制限など設けなかったこともあり、小学生から５０代まで、幅広いニーズと個性の持ち主がひとところに集まりました。

そんな２００５年から２０１０年までの５年間のフリースクールは、煮えたぎるマグマのようなエネルギーに満ち、何でもありのごった煮で毎日問題だらけ。未整理で未分化で、カオスの様相を呈しており、今から思えば「野生の時代」とでも呼べる時期でした。私も職員として、人間として「今、力をつけなきゃとって食われちまう！」という危機感をもちながら、日々必死で目の前の一人と向き合った記憶があります。

けれど不思議と、生きる力を皆で分け合っていた時代でもありました。問題だらけでぶつかり合いながら、知らず知らずそのことに生かされ、成長させてもらいました。この頃の訳のわからない、理屈にならないエネルギーの蓄積が、２０１１年以降の事業の広がりへとつながっていきます。

今回記念誌を作成するにあたり、この「野生の時代」を共に過ごしたフリースクールOBたちに会い、話を聞いて回りました。大学に通っていたり、大工になっていたり、生き方を探していたり。彼らの今はさまざまですが、一つ言えるのは私にとって在りのままの彼らこそが、今も昔も変わらず「光」であるということです。

（理事　中山　崇志）

あの汚いボロボロの建物で、雨漏りして、風呂は薪で沸かして、雑魚寝で。雑貨屋みたいなところに行ったら消費期限が「昭和」の洗剤普通に売ってて。もう何が楽しいんだろって感じだったけどこれがねえ、面白いんだよねえ。

あそこ行くと布団干しとか、風呂沸かしとか掃除とか、やりたくなるんだよね。

初日の夜にホームシックになって帰りたくなる。だけど翌年も行っちゃう。そして初日の夜にやっぱりホームシックになるんだ。

朝釣りに行って、昼ビーチに行って、夕方バーベキュー食って、夜釣りに行って、深夜に麻雀やって。あ、小さい子どもたちは早く寝るよ。これ言っとかないとね(笑)。

マクドナルドさえあれば、住んでもいいな。

森にトレッキング行ったとき、中々帰り着かなくて森の中だいぶウロウロして、中山さんは「大丈夫だ！」みたいなこと言ってたけど顔が心なしひきつってたような。あれ、ぶっちゃけ迷ってたよね？

まきばたけでゴボウ作ったら超長くて。掘っても掘っても出てくるから、「これブラジルまで続いてんじゃない！？」「いやアルゼンチンでしょ」とかやってたね

それはもうアレでしょー。ちょっと言えないけどさ。アレだよアレ。ヤバかったよアレは。中山さん、わかるでしょ。今のまきばじゃあんなことはもうないだろね。

網地島帰りの船でタイタニックのマネしたね。今や超古いよねー

中山さんに電話で何かいろいろぶつけてて、もう何時間も話して、最後に「今から来て」って言ったら夜中なのにホントに来ちゃった。中山さん、ああいうときはね、来なくたっていいんだよ。

月曜日にスタッフが買ってきたジャンプ先に読んで、まだ読んでないスタッフに全部言う、っていうの面白かったな。「必要があれば先に内容言う」「いや必要ないし！」みたいなさ。

スキー行って朝ストレッチしてたら中山さんに電話かかってきて、リフト乗って滑ってきてもまだ電話してて、昼めし食って「さあもう一滑り」って出てきてもまだ電話してた。アレ誰だったの？そして電話代いくらだったの？

芋煮会で野球やってて さ、武田さんがピッチャーやってて、投げようとしたらいきなり「いてえ！」「誰だ後ろから俺の足にボールぶつけた奴は！！」って言い出して。でも誰も何もしてなくて。みんなキョトンとしてたら奥さんに担がれて車乗って行っちゃってさ。後で聞いたら靭帯切れてたって。「オレも年だ」ってへこんでるって。武田さんには悪いけど
なんか忘れられないんだよなー。

スタッフと勉強してたら、スタッフも分数分かんなくなっちゃって、二人でこれどうすんだろ、もういいんじゃない、分数分かんなくても人生何とかなんじゃないみたいな感じになったことですかね

第４期

# グループトーク

震災前後、まきばの事業が大きく広がった時期に加わったスタッフと中山理事が、まきばとのなれそめや今の想いを語り合います。

【対談メンバー】
理事★中山崇志（た）／愛子園★森山一（は）／まきばの実り★箭内久太郎（や）/
あじさいホーム★高橋宣希（の）／アフターケアかなりあ★草仁美（く）

た：まきばフリースクール（以下、まきば）に来るきっかけは、、、武田理事長みたいに感動的なエピソードがあれば良いけどなくて（笑）私は大阪出身で、大学で臨床心理学を学びながら、不登校の子たちを集めてキャンプなどをするボランティア団体に所属して、大学にいるよりキャンプ場にいる時間が長い学生生活を送っていた。自然体験系の研修に参加して、栗駒山に半年暮らした。その後「これからどうしようかな」と思っている時に、武田さんに声をかけてもらった。カミさんの仕事もあるというので、結婚して、一緒にまきばへ。カミさんのご両親には、「長野より北にいかない」と言って結婚したので、今は新婚旅行中。

や：長い新婚旅行ですね(笑)

た：１０年目だね（笑）

た：森山くんはまきばで働き始めたきっかけは？

も：若い時音楽家を目指していたけど挫折して。何かやりたいことを探していた時、アフリカの孤児院をイメージしたんです。その後福祉の世界で働いていたけど、もっと学びたいと思い大衡村のゴスペルタウンへ研修に来た。研修期間が終わる頃、大阪に帰るかどうか迷っていたら、武田さんから愛子園の研修を３か月してみないか声をかけられて、、、今に至ります。

た：もう何年もたってるけど、大阪帰らなくていいの？

は：愛子園で関わった子どもたちが成人するのを見届けたい、という想いです。

た：Ｑちゃんはなんで来たの？

や：もともと過度な競争社会が嫌で。大学時代、就活で落ちたのをきっかけに、面倒くさくなっちゃって。たまたま採用された仙台市役所で１年働いた後、失業保険もらいながら過ごしていたら、両親からまきばを紹介されて見学に来たんです。武田さんと話して。ボラバイトとして来てみない？と言われてまきばに通い始めたんですよ。ＦＳは、楽しかった。カラオケ、ボーリング。遊んでていいの？と。

た：子どもたちがやりたいと言えば、プログラムになるからね。

や：震災を機に、僕も何かやりたい、と中山さんに頼んで・・・

な：確か、文科省の事業を任せたんだよね。

や：その事業をやってるなかで、出口支援をしたいという思いがうまれた。ＦＳに来て、元気になった青年たちが、どうやって巣立っていくか。就労支援など、そこの部分を担いたい。そんな思いで準備して、昨年立ち上がった障害福祉サービス事業所「まきばの実り」の運営を、少しずつ後進に任せて・・・

く：Ｑちゃん作ったばかりでもう引退するの？

や：引退はしないですよ！昼の居場所は実り。夜の居場所としてグループホームを作りたいんです。あとは、プライベートでは、うちの奥さんが里子を引き取りたがっているので、早いうちに里子をひきとって、自分の子どもと一緒に育てていくつもりです。

や：宣希さんはどうしてまきばに？

の：大学卒業後、グアテマラの孤児院に１週間おいてもらった。そこで自分の心が震えて。この子たちのために働きたい、と。その後、震災があって、宮城に来てボランティアを１年位していた。色んな料理屋で働いていたけど、仕事を通しても誰かのために何かやりたい、と思ってたらまきばの求人を見つけた。それで働き始めた。最初はディサービスがメインでした。一生懸命働いていた。その中に認知症のおばあちゃんがいたんです。暴言をはかれたり、叩かれたりされながら、夜勤で関わっていたある日、、、「私はあんたのこと大好きだから」と言われたんです。もう変わる可能性がないと思われていたようなおばあさんでも、心は届くんだ、と実感しました。それでも結婚して子供を授かって、今の給料じゃ生活が厳しいし、仙台からの通勤時間がもったいない、もっと長く関わって早く実をみたい、と思って。武田先生に辞める覚悟で相談しました。そうしたら、自立準備ホームを仙台でやってみないか、と。準備ホームは、刑務所などを出て本当に行き場のない人たちが社会へ出るための、短期的な居場所。そういう方たちに出会えて関われるのに、お金ももらえるなんて、夢のような仕事だと思った。奥さんと子どもと、準備ホームに来る方たちと、衣食住を共にして、生活しています。近い将来は、住居を移して、カフェを開き、ゆくゆくはファミリーホームを創りたいと思っています。成し遂げたいことは、、、シンプルだけど、僕はクリスチャンで。イエス様に出会って変えられた。少しでも多くの人にイエス様に出会ってほしい、そう思って、ベストをつくしたいと思っている。

や：草さんは？

く：武田先生と出会ってから、今年で１２年位なんです。うちの１６歳になる長女が、４才の頃、幼稚園で暴力を受けて、、、失語症になったんです。そこから幼稚園に行かなくなった時に、友人から武田先生を紹介されたんですよ。電話したら、すぐ仙台に来て下さって。娘の時も、息子が不登校になった時も、ずっと武田さんが関わり続けてくださって。仕事を辞めた頃、「アフターケアかなりやを始めるんだよ」と、話を聞いているうち、いつの間にか働きはじめた（笑）私も若い時やんちゃをしてきていて、子どもたちの気持ちもわかる。たぶん肝っ玉母ちゃんが求められているのかな？もともと母親クラブもやっていたり、プライベートでもたくさんの子どもたちの相談を受けたりして、、、。ライフワークの一環です。

く：かなりやでの仕事は、つながりをもった関わりの大切さを実感中。さらに、生活の基盤も大切。協力雇用主さんを探して毎日営業して歩いている。今までは男の子だったから土建屋さんとかが典型だったけど。今は、食べ物屋さんとかの女性枠をさがしている。

や：そのノウハウを実りでも！どうやったらそんなにつながっていけるんですか？

く：つながっていくというより、動いているうちに気づいたらまきこんでいた、感じ？台風みたいな（笑）

く：まきばの四季にわんちゃんの餌台載せたら、欲しいという声がすぐ出てきて。

や：室内で作業も必要だと思ってたので、ぜひそういう製作もしていきたい。

く：まきばブランドを作って、売り出して収益あげていきませんか？

や：ぜひ！

く：この支援を通して、不必要な人は１人もいない、ということを伝えていく。その人たちが成長する姿を見つめていたい。

や：ぜひ協力しあっていきましょう。

いつまでも新婚旅行中
中山 崇志

まだまだ帰りまへんで
森山　一

カフェ「HOPE」開店しました
高橋　宣希

引退したらお化けになりたい
箭内　久太郎

871ヘクトパスカル
草　仁美

# これからの
# １０年

私たちは「目の前の一人の必要に手を伸ばす」ために、
「ないものを創り、あるものを活かす」という思いで日々活動しています。
１５周年の今、これまでを振り返れば、
まさにないものを創ってきた１５年間でした。

そしてこれからの１０年は、
「あるものを活かす」がテーマになってくるだろうと思っています。
フリースクール、愛子園、峠のまきば、、、、
１５年かけて創りだしてきた小さな苗木１つ１つを、
豊かな樹に育てていく１０年間。
その過程では、力をつけた職員や利用者、
やりたいことがいずれ実って新たな種となり、
新たな土に芽を出すでしょう。

さらに年月が経てば、
まきばの理念をその身に宿しながらも多様な特徴をもつ樹が増えて、
いつか森になっていきます。
そうやって「誰もが自分らしく成長し、かつ周囲と調和し、安心して生きることのできる地域社会」を実現していきたいと思っています。

１本の大きな強い生命ではなく、
在りのままの生命の豊かな集合を目指して。

１００年後、「まきば」が組織や場所の名前ではなく、
目には見えないたくさんのつながりの名前となっていたら。
そのときに、私たちのミッションは成されると思っています。

# 多様性とつながりによる活動の成長

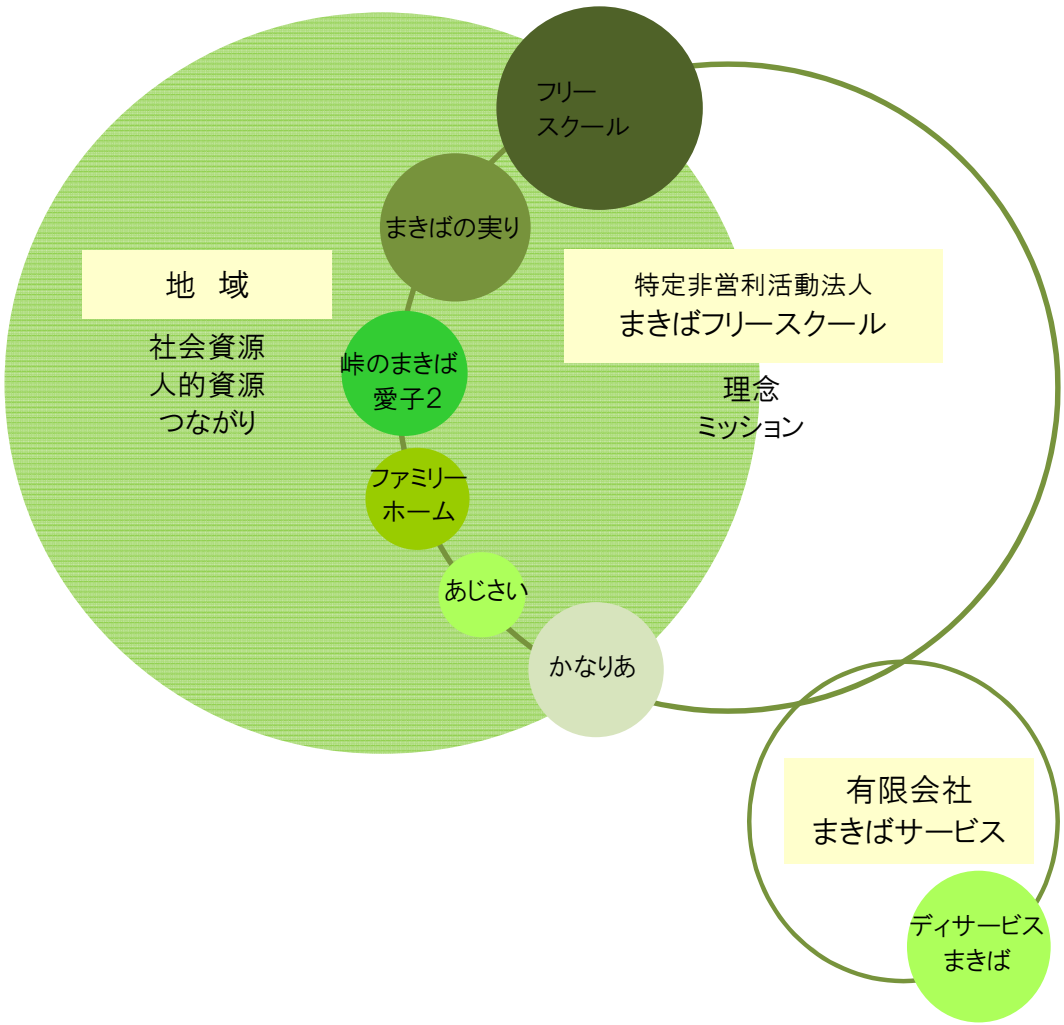
スタッフ、利用者共に、縁あってまきばにつながった人たちは、まきば内で想いを実現しつつ、力をつけていきます。

その後、そのまま立場を変えまきば内で活躍する場合もありますし、地域へ飛び出していく場合もあります。

私たちは、組織のなかでのみ、理念が達成されることを望んではいません。

NPOまきばフリースクールがどんどん大きくなるのではなく、想いを共有した多様な場や人が、地域に増えていくことで、社会そのものを変化させることを目指しています。

# 組織イメージ図




法人の掲げる理念や目指すミッションをベースに、各事業を展開しています。

各事業は、共につながりあい、支え合っています。

また、活動は法人内だけで完結せず、地域社会ともつながっていけるように広げています。

「生き辛さを抱えた一人の子どもの、生涯にわたる必要に応え続けられる組織」であり、「生き辛さを抱えたありのままの子どもが、生涯にわたり、誰かの必要に応え続けられる組織」であることを目指しています。

# 職員・ボランティア行動規範

【行動目的】

誰もが自分らしく成長し、かつ周囲と調和し、
安心して生きることのできる地域社会の実現

私たちは目的を達成するため、その道しるべとなる「行動指針」と、自らを振り返り立ち戻る原点となる「具体的行動マニュアル」を制定しています。一人で強くなるのでなく、みんなで豊かになっていくための、つながりと共有の根本となるものです。

# 【行動指針】

## ①　必要があれば先に手を伸ばす

私たちは「目の前の一人」のニーズと希望の実現のために、今あるものを活用し、ないものを創っていきます。

## ②　三方すべて良し

私たちは目の前の一人のニーズと希望を最優先し、かつ「本人を中心にしたつながりにとっての最善」を共に考え、実現していくことを目指します。

## ③　一生の付き合い

私たちは問題解決のみを目的とせず、目の前の一人の在りのままを良しとし、その生涯に共に在り続けることを目指します。

## 【具体的行動マニュアル】

○私は目の前の一人やその家族との信頼関係を大切にします。

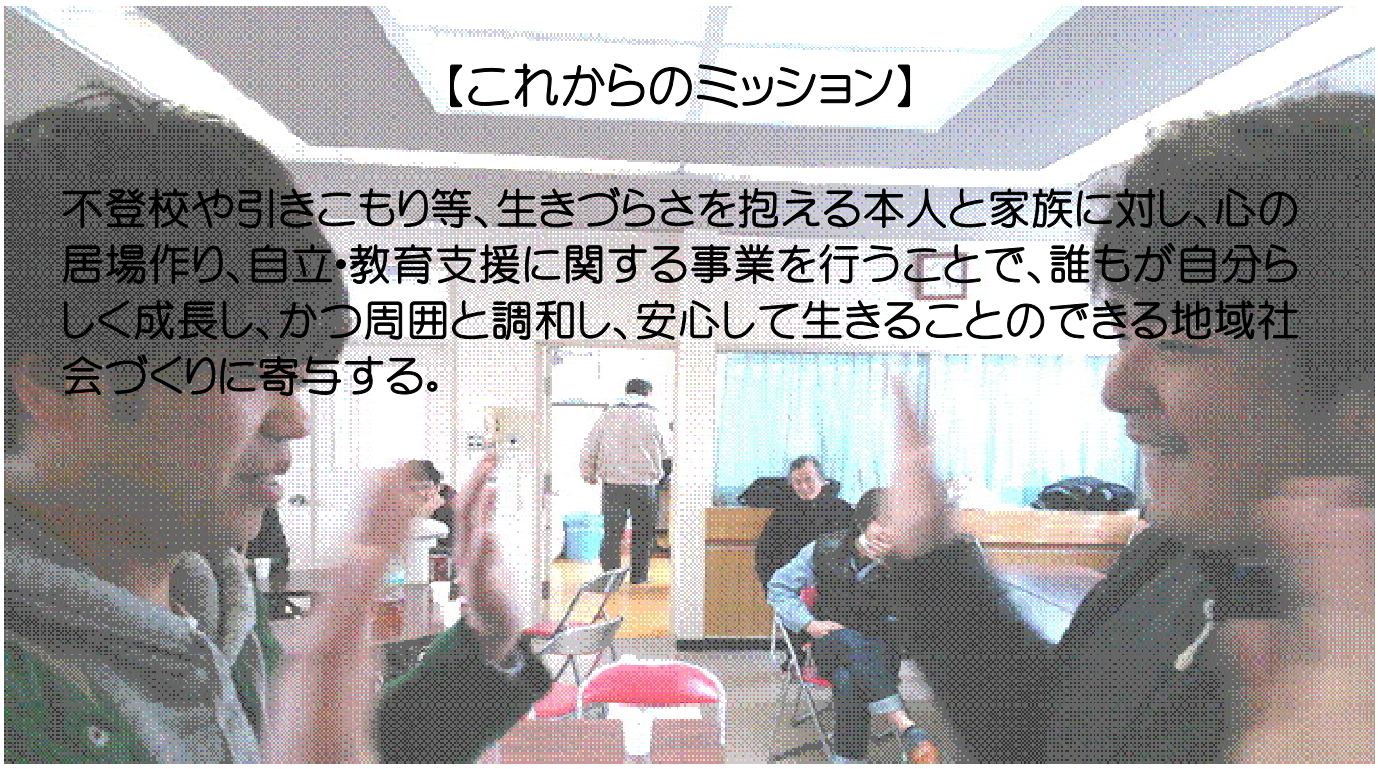
○私は目の前の一人への差別･虐待を許さず、権利侵害の防止につとめます。

○私は施設環境の改善向上につとめます。

○私は目の前の一人と等しく価値のあるものとして私自身を扱います。

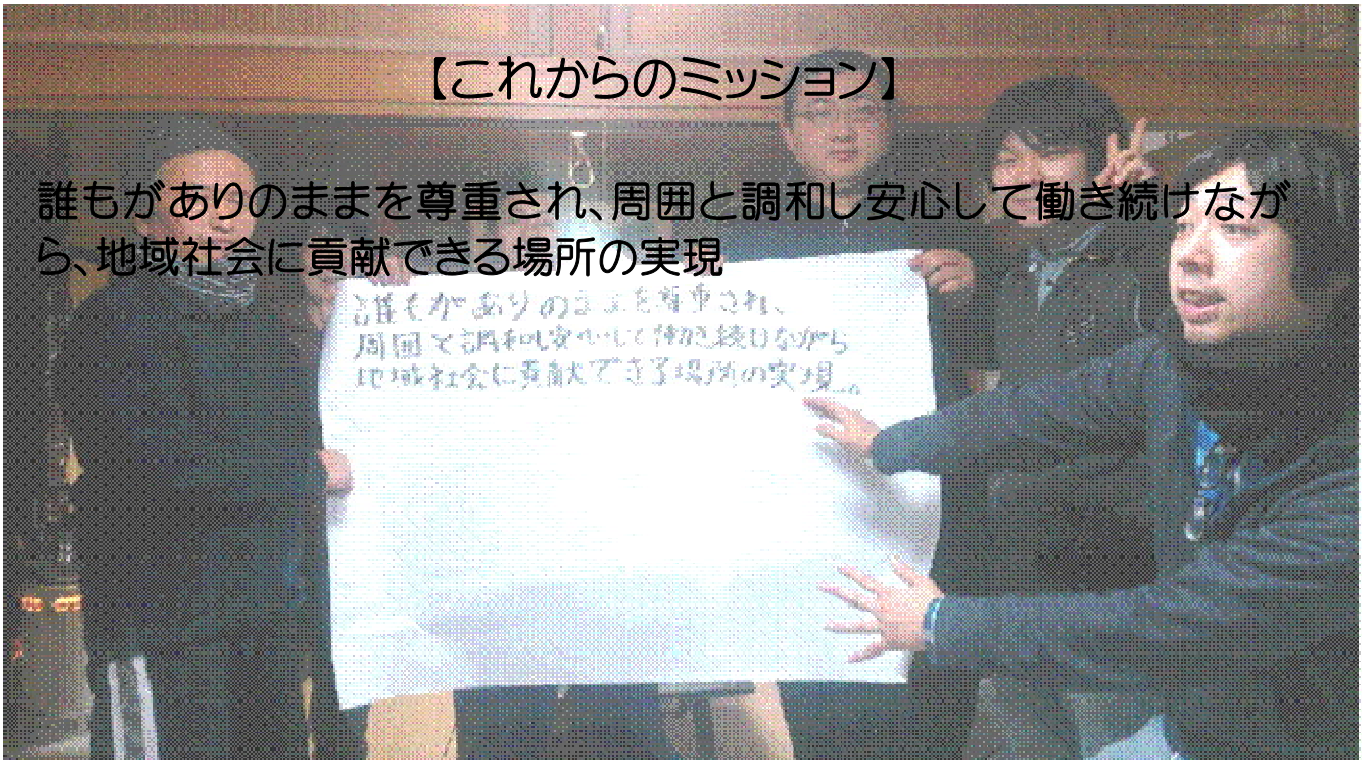
未来の10年　教育支援・居場所提供事業

## 事業1　まきばフリースクール



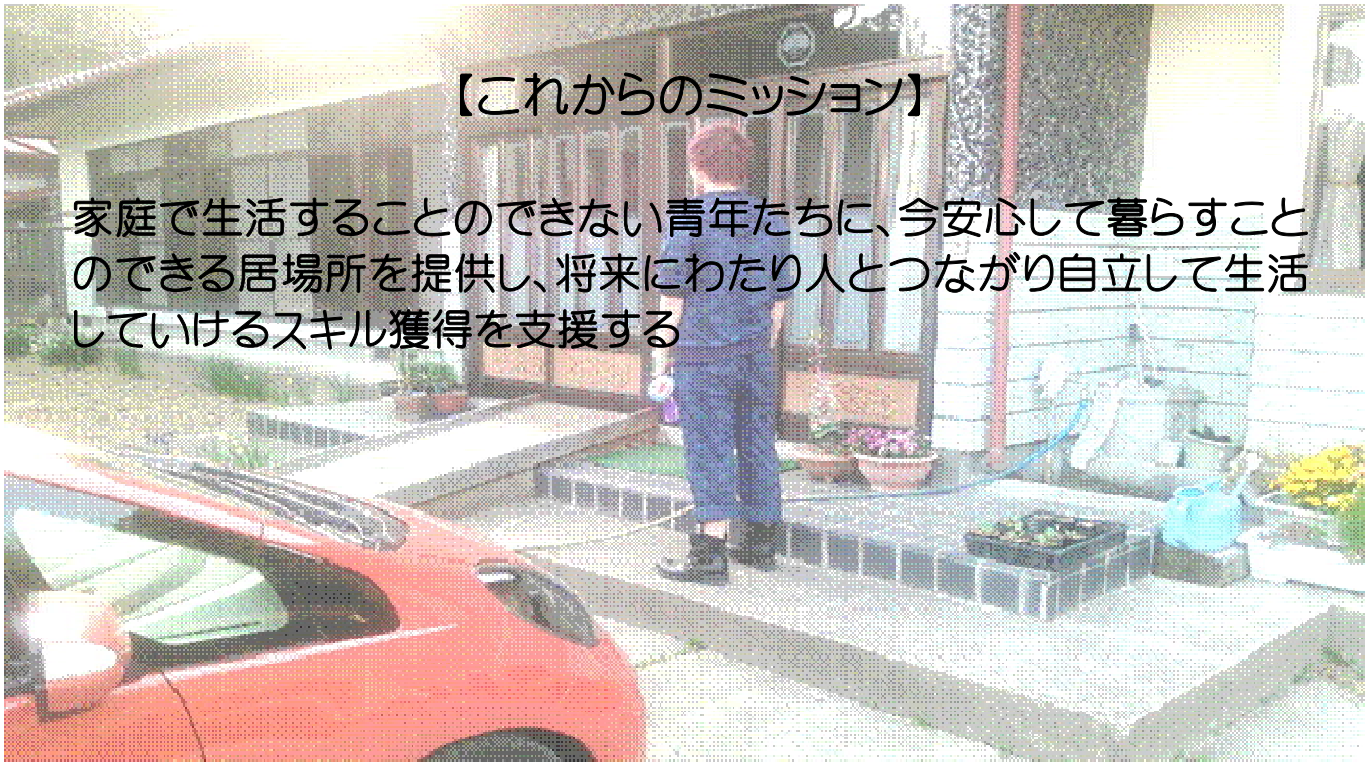

未来の10年　障害福祉サービス事業所

## 事業2　まきばの実り



未来の10年　自立援助ホーム

## 事業3　峠のまきば・愛子２




未来の10年　ファミリーホーム

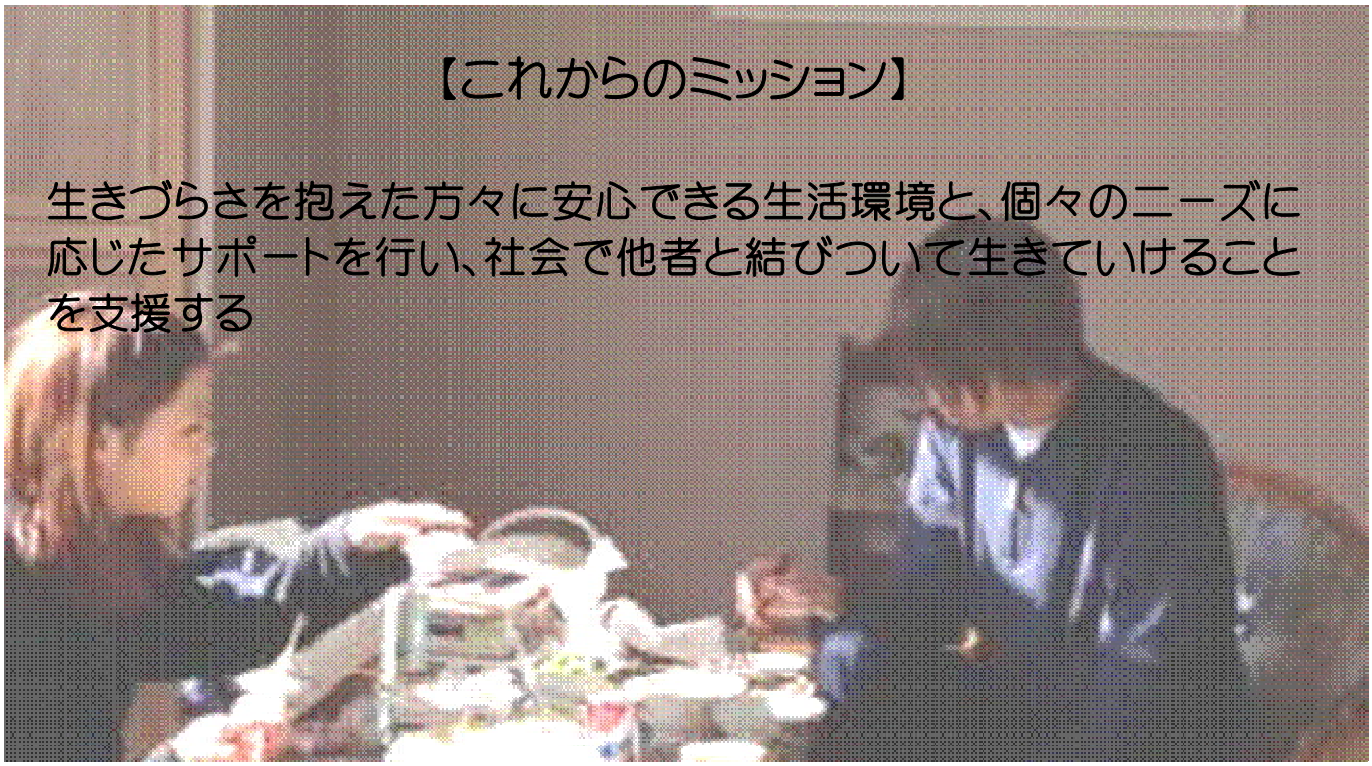
## 事業4　愛子園

未来の10年　自立支援事業

## 事業5　あじさいホーム

未来の10年　アフターケア事業

## 事業6　かなりや



# 5年後の未来カレンダー

今から5年後…2020年のまきばフリースクールは
いったいどんな活動をしているのでしょうか？
未来の活動カレンダーをつくってみました。

★★★★★★★Spring★

★★★★★★★Summer★

★★★★★★★Autumn★

★★★★★★★Winter★

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

**まきばアート展覧会**
写真・絵画・手作りクラフトなどなど、みんなの創った作品の展覧会です。

**東北フリースクールスポーツ大会**
東北のフリースクールが集まり、フットサルや野球などでチャンピオンをめざして競い合います。

**網地島サマーキャンプ**
東北のハワイこと網地島でサマーキャンプ！釣り・ビーチ・バーベキュー・花火などなど盛りだくさん。日帰りから4泊5日まで選べる5コース！

**定禅寺ジャズストリートフェスティバル出場**
フリースクールのバンドクラブが屈指の音楽イベントに出場！

**まきば祭**
ステージ発表や飲食ブース、露店が並び、まきばにつながる沢山の人が年に一回一堂に会するお祭りです。

**クリスマス＆忘年会**
年末恒例のお楽しみイベント。クリスマス会では大ビンゴ大会などが開かれ、20才以上が参加できる夜の忘年会も盛り上がります。

**みんなまとめて誕生日おめでとう祭**
縁あってまきばに関わるみんなのその年の誕生日をまとめてお祝い。

寄稿

# まきばに関わって

心理カウンセラー　早坂　文彦

まきばフリースクールには、武田先生と知り合ったことがきっかけで、徐々に関わりが増えてきました。特に２０１３年の秋より臨床心理大学院の心理実習生として受け入れていただいてからは、その関わりはより密になったように思います。毎週１回、カウンセリングのために通わさせていただき、若い方々、子どもたち、お年寄りの方々から、たくさんのことを学ばせていただきました。みなさん一人ひとりが、一人では抱えきれないような苦しみを抱えながらも自分の人生を真剣に生きていることに、襟を正される思いをしました。実習を終え、今度は嘱託のカウンセラーとして関わらせていただきたいと申し出、受け入れていただきました。

心理職として関わるにあたっての私の役割は、若い人たちが自分で自分の人生を切り開いていくことができるように、力づけることだと考えています。ですから、私のほうから助けてあげる関わりはできるだけ控え、どこにその人の力があるかを見極めその力を最大限発揮できるように応援したいと思います。ニーバーというキリスト教の学者がいますが、この人の有名な祈りに、次のようなものがあります。「神よ、どうか私に、変えられないことを受け入れる冷静さを、変えられることを変える勇気を、そしてその両者を見極める賢明さをお与えください。」カウンセリングで力づけるというのは、まさにこの冷静さと勇気と賢明さを持ってもらうことだと思います。そして人の真似事の人生ではなく、自分を極めてもらいたいと思うのです。そう申し上げるのも、私自身が苦しむ者としてそのように生きたいと思っているからです。

武田先生は、ニーズに答えることをまきばの使命にしておられます。できるかどうかの判断はしない。ニーズには神様が答えようとしておられるのだから、その力は神様から与えられるという信念をもって不可能に挑んでこられました。そこには一見無謀さと感じられるものがありましたが、その都度、実際に助けがあったことを伺っております。イエスが十字架につけられるように、支援する者が倒れたとしても、その倒れる姿を見届けて、傷ついた人々は自分の価値を信じられるようになり立ち上がっていく。そのときに、倒れた支援者も、あたかもキリストの復活のように、立ち上がることができる。この考えはまきばの精神の真髄です。私にそれがどこまでできるかわかりませんが、限界のある自分を完全に神様にゆだねてしまうとき、自分という存在が完全に神の業になると信じ、カウンセラーとしての仕事をしていきたいという思いでいます。

これからもよろしくお願いいたします。

寄稿

日本ファミリーホーム協議会会長
宮城県里親会なごみの会会長
ト蔵康行

まきばフリースクール１５周年おめでとうございます。私は社会的養護に関わる者の一人として、まきばフリースクールへの期待を込めて寄稿させていただきます。

少子化にもかかわらず子どもを取り巻く環境は、改善される気配はありません。子どもが子どもらしく安心して育っていく、そんな当たり前のことが、難しくなっているのかもしれません。私自身もファミリーホームを１０年近く運営していますが、子どもたちにとっては、本当にたいへんな時代だと常々感じているところです。

宮城県内では、およそ５００人の子どもたちが、里親家庭やファミリーホーム、児童養護施設、乳児院等で、実親と離れて生活しています。まきばフリースクールでは、現在、１つのファミリーホームと２つの自立援助ホームを運営しており、その中で、さまざまな課題を持つ子どもたちや青年たちの支援を行っています。

また、フリースクールでは、社会的養護の周辺にある子どもたち、或いは、大人をも含めてこれまで支援の働きを積み重ねてこられました。そうした人たちは、いわば社会の中で一番弱い立場にある人たちであり、具体的な助けを必要とする人たちでもあったと思います。宮城県内においては、社会的養護を含めたこうした広範な活動を行っているのは、まきばフリースクールだけと言えます。

子ども期の支援と自立支援、また、社会人となってつまづいたあとの支援など、働きはつきることはないと思いますが、これからもその働きが用いられることを心から願っています。社会的養護のみならず周辺の関係機関や団体とのつながりも多いことと思います。

是非、そうした機関や団体と私たち社会的養護の団体とのつなぎ役としての役割も期待したいと思います。

# これまで活動を
# 支援してくださった方々へ

## 武田　和浩

「安心できる心の居場所」をテーマに掲げ、1999年9月から船出した「まきばフリースクール」は、これまで、「来る者拒まず・何処にも居場所のない方々の受け皿になろう」の方針で、様々な必要を抱えた方々を迎え入れてきました。

私たち家族6人と動物たち（ポニー、羊、うさぎ、犬、ねこ）で始まった小さな働きも、現在は、85名程の群れとなりました。そのうち40名程が有給スタッフです。その大半は、何らかの問題でまきばに集い回復しながらの当事者スタッフです。

普通では考えられないこの運営スタイルが、「まきば」の特徴であり、可能性です。そこには、「まきば」の存在意義、理念、強い思いが込められています。

どんな人でも、みんな意味がある。価値がある。必要とされ、愛されている。人生に挫折し絶望していても、存在の価値に優劣はなく、ハンディを背負ったそのままで誰かの役に立てる。互いの悲しみを繋がる力に変えて、分かち合い満たし合う時、苦しんだ経験は、宝へと変わる。

まきばの理念は、チャレンジに満ちています。私が人生の拠り所としている聖書の言葉の中にこうあります。
「あなたのパンを水の上に投げよ。ずっと後の日になって、あなたはそれを見いだそう。」
見過ごす事の出来ない必要があれば、先に手を伸ばす。
無駄になるのを承知して、それでも手元のパンを投げるのです。そんな事をしたら、明日の保証がなくなります。やり繰りが付かなくなります。…、でも大丈夫。ずっと後の日に、見いだすのです。「まきば」は１５年間、出会う魂の必要に応えてパンを投げ続けてきました。いつ墜落してもおかしくない低空飛行の連続でしたが、たくさんの個性あふれる笑顔が育ち、旅立っています。これもひとえに、祈り、支えて下さった皆様のおかげです。

これまで、有形無形の多大なるご支援をいただいた皆様に、厚く御礼申し上げます。

# ’15 Photograph

**Thank you.**

# Makiba
## 15th Graphic

特定非営利活動法人
まきばフリースクール

宮城県栗原市高清水袖山62－18

【相談受付電話】
090－3127－8925

TEL　0228－25－4481
FAX　0228－25－4482
E-mail　npomakiba@yahoo.co.jp

2015年8月発行
発行人／武田和浩
発行／特定非営利活動法人まきばフリースクール
編集人／中山崇志・櫻井由紀

# On

# a

# Long

# Journey